

偏見だらけの現場教育論

大学理工学部教授 雨谷 昭 弘

1968年4月から既に44年目の教師

業。挫折と試行錯誤を通じて、自らの教育観のようなものを少なくとも実務上には確立できたと考えます。それは偏見に満ちた価値観と平均的とは言えない個性の故に、いささか常軌を逸した、あるいは明らかに常識的ではない考え方であると感じているものの、それでも教育現場の方々の実務遂行の上に多少は有用かと考えております。この場をお借りして、私の教育に対する考えを述べたいと思います。

1. 对学生の基本的姿勢

①教室の全学生に好意的に受け止められる講義は不可能

②全てのゼミ生に好かれるのも不可能

無理して頑張ると自らが八方美人に見えて自己嫌悪に陥ります。多くの学生に好まれる人間になることも、多くの学生に好まれる講義を行うことも至難の業と悟るべきです。神に近い人格の教師は別ですが、一教師（人間）として毎年4〜5名の学生と仲良くなれば、あるいは講義法に共感を持つてもらえれば極めて有り難いことと思います。年によつては一人か二人かも知れませんが、それでも十分に幸せなことです。

③教えることは学ぶこと

教師として給料を頂きながら、毎年数多くの学生と出会え、講義しながら

自らが学べるというのは本当に有り難いことです。その中で、例えば電気回路学など毎年、少しずつ新しい発見や知識が身につくのも有り難いことです。電磁気学は未だに良くわかりません。講義は毎日が新しい実験のようです。

2. 講義の事前準備

初回の講義時間に当該講義の基礎的事項、学生の意識レベル等を探るためのアンケートを取ります。あるいは常識テストを実施します。（いずれも15〜20分程度。口頭説明／挙手の方法もあります）アンケートは特に再修生には必ず書いてもらうように努力します。これは当該科目を落とした学生のアンケートから何がわからなかったのか、自分の講義法に問題がなかったのかが見えて来て非常に有用だからで、特に再履修クラスには不可欠と考えています。敵を知り己を知れば百戦勝つように、学生との戦いの場である講義においても優位に立つことができるかと考えます。

また常識テストは第一回目と最終回に行うことで、当該講義に対する学生の理

解度や進捗状況が把握でき、次年度での講義のあり方に大きな参考となります。

また、第一回目と最終回の上昇度を採点結果に加味することもできます。なお、最終回のアンケートは講義の問題点を知らぬのに価値有です。

3. 講義法

① 学生が寝ない(眠れない)講義にする

携帯マイク着用(大・中教室)で教室を常に歩き回り、眠そうな学生やゼミ演習の学生に必ず話しかけます。また90分間は長すぎするため、途中5〜10分の休み時間を入れるようにします。話題は社会情勢、自分の体験、研究室のこと、エピソード等の雑談・漫談でも良いと思います。学生が寝るのは興味が持てない講義内容、あるいは講義法であると自省しています。それから板書に追われ、学生に直面することなく説明するのは学生にとって退屈で、他の学生からコピーをもらって授業に出なくなる可能性が大きいようです。それなのに出席を取ると学生の反発を招きます。

② 学習意欲を持たせる動機づけ

小クラス(基礎必修)では隔週程度、大クラス(専門選択)では時間に余裕がある時に、質問に答えた学生や眠っていた学生を4〜5名、15分程度のコーヒータイトに誘って、単位や得意・不得意科目などについて雑談します。

また、1クラスにつき4〜5名が限度ですが、「90点以上取ったら夕食に招待するが、取れなかったら生協で昼食接待してよ」などと学生と約束したりもします。学生にその存在を教師が認識していると自覚させることにこそ大きな意味があると考えています。「今日はどうした? 元気ないな!」の一言が、その学生へ与えるインパクトは絶大です。

③ 見学会の開催

科目を担当する中で機器、設備の実体を知らない、あるいは見たことのない学生に説明することの困難さを痛感し、毎年見学会を実施しています(バス3台、150名程度)。15年程前までは電力会社、メーカーなどは大歓迎でしたが、機密情報保護法が成立して

以降は、準備に手間がかかりすぎるようになり、一人で実施するのは至難となりました。そこで、3年前から本研究室教員3名+外部2名、計5名の引率者+学生40〜50名(バス1台)で電気工学科、電子工学科の全学生(160〜240名)が4年間に一度は電力設備あるいは電気関連メーカーを見学するようにしています。もし可能なら、ゼミ演習の一環として各担当者が毎年1回ゼミ演習の学生(および研究室院生)を引率して見学会を実施できればとも考えています。見学会は可能な限り小人数が好ましく、見学会前後の時間での先生と学生の対話に価値があると考えています。なお、この見学会のほかに、学生自らが企画・交渉してのグループ見学会も推奨しています。

4. 教科書

全講義担当教員が当該講義用に自著の教科書を出版している時が来ればと期待しています。もちろん、各科目の優れた教科書が既に出版されていますが、既版教科書より更に優れた教科書を本学の先

生方が作成できればと言うのが夢です。

但し、売ること（印税収入）が目的とならないように注意しなければなりません。

講義におけるテキストの形態には(a)板書(b)教科書(c)プリント+参考書、の大きく三種があると考えます。これらに関する学生の意見は多種多様ですが、次のように整理できるようです。

(a)板書

書き写す作業だけに終始し、考え、理解する余裕がないと思われまます。成績不良の学生は特にその傾向が強く、欠席、眠る、雑談などの方向へ進み易いようです。結局、成績優秀の友人のノートをコピーしてもらうのが最上との結論に至りがちです。

(b)教科書

悪くはありませんが、教科書通りの講義なら眠たくなり、出席の必要も少ないと思われまます。講義の進行が早いと、教室では分かった気になっていたものが、後になると分からないことも増えます。教科書を買うことは安心感を買うことになっているかもしれません。

(c)プリント+参考書

(a) (c)では最良との意見が多いです。但し、プリント量が多いと(b)と同じです。また参考書を買わざるを得なくなる、(b)より悪質です。

個人的偏見からすると必要箇所のみを記入して行く穴埋め式教科書（ノート又はプリント、ポナンザ式？）が、現実的にはとりあえず最良かと考えております。

5. 試験

まず、半分程度の時間で半数程度の学生が回答提出・退出していかを見まます。それは、試験は原則として「理解できているか？」を問うものと考ええるからです。また、暗記で点が取れる問題は不適当であり、教科書持込可でもよいとも思います。もちろん、持込不可で暗記することにより理解が進むのも事実です。で、両者のバランスを適当に取るのが良いかと思ひます。

加えて、カンニング未然防止の方策、具体的には全員席の入れ替えを試験開始前に実施します。特にカンニング、答案スリ替え等を予定している学生は、教室

後部の席に集まっていることが多いので、意図的に前方の席を指定します。各機の右側一列のみに着席させ、次に左側のみ、余れば前列から机中央に着席させるといふ形です。

6. 学生への対応 (know how)

期末試験終了後、出来なかった学生が「この科目を落とすと卒業できず、就職も決まっているので、レポートを出すから通して欲しい」と訪ねてくることがあります。かつては今というストーリーの如く自宅の前に座りこまれたり、駅で待たれたりしたこともありましたが、通してくれないければ死ぬという脅迫にノイロ一ゼ気味になった先生もいます。私はそんな依頼に、「了解。但し、全受験学生にレポート提出の連絡を取り、その了解を得、全学生のレポートをまとめて持つてこい！」と指示します。その学生は二度と来ません。

また試験が近づくと「試験問題を教えて下さい」との要望があります。私の返事（但し、マイクを使って全学生に聞かせるように）は「試験問題を教えて欲し

いとの依頼があった。その方がよいと思う人は手を挙げて」というものですが、学生の反応が面白いのです。挙手が半数以下だったら、「賛成少ないので、却下！」で終りにします。もし、挙手が半数以上でしたら一層面白く「多数が試験問題を教えることに賛成した。従って、結果として全員満点で、全員合格となる。全員合格の講義は先生の教え方が極めて上手で、全員十分に理解できたか、それとも先生が極めていい加減で、扇風機で答案用紙を飛ばすのも面倒であったということになる」。そこで「私の講義を十分に理解したと思う人、手を挙げて！」と質問すると、普通はバラバラと手が挙がる程度でし、3分の1以上の学生の挙手があったら、私はこの講義に関して満足してよいと自らに言い聞かせることができます。挙手の数が少ない場合は「皆さんはこの講義を十分に理解できなかった。すなわち私の講義はいい加減で、私は教師失格との結論になる」との説明の後、その学生に、「君が学長だったら、こんな先生どうする？首にすべきだなー！」と問いかけます。このあたりで学

生は困った顔をしつつ、逃げ出すか、うなずきます。うなずいた学生に「失業したら、何年分か給料払つてよね」と言うともちろん困惑し、他の学生は笑い出し、一件落着となります。眠気覚ましに手頃な漫談といったところです。

なお、アフターケアとして、試験の後必ずその学生へ「出来たか？」と尋ねます。Bであれば「試験問題を聞く必要なかったな!」、Zであれば「次、頑張れよ!」と声をかけてあげれば十分です。それよりも、どういう内容であれ、学生から先生に話しに来ることを可能な限り大切にしたいと思っています。

7. ゼミ演習

(旧アドバイザークラス)

①運営

1968年から今に至るまで、アドバイザークラスによって先輩・後輩のつながりを保っています。ここ15年程は、かつてのアドバイザークラスの学生の子息が新入生として参加することがあり、自らの年令を自覚させられると共に、その有用性を再認識していま

す。1968年〜1994年（今出川時代）は入学式後の最初の日曜日午前10時市電銀閣寺電停前集合、1時間で大文字山頂の登り・降り、受験で鈍った身体をほぐし、哲学の小径で桜と西田哲学の話などして、若王子へ。新島襄と関係者の墓、そして松本五平、ラーネッド、デービス、山本覚馬、徳富蘇峰などの同志社人の話をしながら、自宅生持参の弁当を分け合い昼食を摂ります。College Songと大学歌の練習では、3年後のアドバイザークラス集合でCollege Songを必ず歌えるようになりなさいと指導します。その後、南禅寺散策、東山通から烏丸通まで西へ歩き、途中で加茂川を徒歩で渡って、今出川室町上ルのレストランで午後6時頃から新入生歓迎（以下、新歓）コンパを開催していました。

このようなアドバイザークラスでの学生指導法は教師としては邪道かと思いつつ、クラスの平均5割近くの学生が3年次終了時に学科の成績上位者1/4に入るといふ興味ある現象をもたらししています。また蛇足ではありますが

が、私のアドバイザークラス出身の本学教員が7名もいるという不思議な結果もあります。人間失格の個性が反面教師となつて学生の自主性と勉学向上意欲を高めることになったと推測しております。学生に「授業に出るよ！」

と言うよりは、「サボつたらいい！」と言う方が全般に授業に出ることになる傾向があるのと同じことかもしれません。もちろん、もともと授業にでない学生には「サボつたら」は禁句ですが。新歓コンパの次は、7月の試験直後に出町の商店街で花火、酒やつまみ、おにぎりを買つて加茂大橋の河原での花火大会。秋には北山の「沢の池」で、紅葉を見ながら泳ぐのも悪くないと指導していました。

以上が今出川時代のアドバイザークラス年間スケジュールです。どういう訳か、他学部、他大学の学生もこのアドバイザークラスに参加することがあり、1969年秋には東大、京大、精華大、光華大も加わつて今出川キャンパス自主講座も開講しました。その中から弁護士で医者とか、反公害の専門

家とか、面白い人材が育ってきたのも事実です。

アドバイザークラスの最重要ポイントは、学生同士の先輩・後輩のつながりです。クラブ・サークル活動に打ち込んでいる学生は問題ないのですが、それ以外のいわゆる真面目な学生は、横のつながりはあるものの、縦のつながりを持ってないのが大きな問題です。これは就職直後に如実に現れます。アドバイザークラス活動、特に新歓行事の目的は、院生を含めた先輩と親しくなる場を新人生に与えることにあります。この場さえ確立できれば、アドバイザークラスの活動に先生が時間を取られることはなく、行事の日程だけ決め、あとは学生たちに任せれば楽です。ゼミ演習チューターとしては成績優秀な院生ではなく、新人生にとって話し易い、指導性のある学生が望ましいです。学生にとつても先生よりは先輩の方がつき合い易く、かつ基礎科目のわからないところを教えてもらうのも先輩の方がわかり易いと言うのが一般的です。

②ヒッチハイクゼミ旅行

本研究室の活動の一つである「ヒッチハイク」ゼミ旅行は、電気工学分野（大学、学会、電力会社、電機メーカー等）で全国的に知られておりました。本研究室の研究レベルと共にその知名度を挙げる広告塔的活動であり、ラジオの実況中継の対象となつたり、新聞のコラムで取り上げられたりしました。そのインパクトを最大に感じたのが、参加したゼミ学生本人でありました。

その是非は別として、本研究室の卒業生の大学4年間（あるいは6年間）の思い出は「ヒッチハイク」に集約されど度々聞かされております。特に嬉しく思つておりましたのは卒業後10年程度のゼミ出身者が「リフレッシュ!!」のためにこのゼミ旅行に参加することが何度もあったことです。

このヒッチハイクゼミ旅行は、1974年から2005年迄実施しておりました。卒論審査の翌日から3泊4日で3つのコースを毎年順番に回る形式としておりました。旅行の初日、(1)必ず宿舎に到着する (2)授業中の居眠り

はいいが、運転している人の気持ちを考え、乗せてもらっている間は居眠りしない (3) 車を降りる時は頭を下げ有り難うございましたと大きな声でお礼を言う、との嚴重注意を与えた上で、「初対面の知らない人と話ができるようになれば社会に出て大丈夫」と話してあります。どちらかと言えば社交性に欠け、話下手な工学部の学生にとって、知らない人に何かをお願いし、感謝を素直に表現し、そして何よりも人間は温かく優しい存在であることを知ることは、大学の講義よりもはるかに大きな価値があると信じています。

宿舎での夕食の後は、どんな人のどんな車に乗せてもらい、どんな事が起きたという話で一晩中盛り上がりつつありました。言うなれば小学校1年の入学式の後のようです。社会に旅立つ進水式のようなものであったかと考えます。もちろん、思慮のない会話で運転手からまれるなど、危険な目に遭った学生もおります。しかし、それはいずれ人生の何処かでそれぞれに出合うことです。なお、このゼミ旅行のも

う一つの目的に、卒業不可の学生に引導を渡す仕事があります。これは卒業不合格(就職取消)で自殺しかけた学生がいた時の経験で、ゼミの仲間と一緒にの方が無難であること、しかし、仲間には知られたくない意識を持っていることから、例えば2日目のグループ組合せ(原則1グループ2名、女子学生の場合+男子2+計3名)で私と組む相手は、「卒業不可となった学生である」との暗黙の了解が行き渡っていることによります。従って最終日の打上は卒業かつ留年祝のコンパとしております。

以上のような教育法は『新島襄書簡集』(岩波文庫)、林竹二・灰谷健次郎『教えることと学ぶこと』(小学館)、ウェーバー『職業としての学問』等の著書にも述べられていることと共通しており、これらの著書は小生の座右の書でもあります。興味があれば一読されることをお勧めいたします。

小生の教育論、講義法等について質問等ありましたらご連絡下さい。可能な限り

り対応させて頂きます。Faculty Developmentの一つとして、小生の講義現場にも何時でもお出下さい。

同志社大学の国際化を支える貴重な財産

文部科学省大臣官房文部科学広報官 長谷川 和弘

〔執筆時〕同志社大学国際連携推進機構審議役

はじめに

私は、かつて4年ほど、在インドネシア日本国大使館で、現地での日本留学広報や国費（文部科学省奨学金）留学生の募集・選考・送り出しを主に担当していました。そして、同志社大学では2009年8月から、世界の様々な国や地域からいろいろな形で来日し、本学で学ぶ学生さんたちを支える事務の一端に携わっています。

つまり、海外から日本の大学で学ぶ学生を送り出し、そして、日本の大学で海外からの学生を迎える、という一連の流れを、幸運にも経験することができたということになります。

そのような経験をさせていただけたことと、身近なところで一緒に仕事をする教職員の方々に恵まれたことに感謝しつつ、本稿では、本学の国際化を考えたときに、これは「貴重な財産」だと私なりに考えるものをいくつか挙げてみます。

すばらしい同志社大学の立地と景色

私には、勤務する今出川キャンパスの立地の良さとキャンパス内外の美しい景色が、着任当初から今日まで、とても印象に残っています。

他の大学が決める言うことのできない、同志社大学のための強力なPR材料として、本学の立地の良さと美しい景色は、大いに活用いただきたいと思います。

特に、海外では日本の個別大学のことについて、いかに正確に知ってもらい、その上で好印象を持ってもらえるかが、その大学への志願者を得る上でとても重要ですので、立地と景色のような分かりやすい視点は効果的です。

実際、在任中に数回参加した海外での広報の機会にも、本学ブース来訪者に本学を紹介する会話の導入として持ち出してみたところ、それをきっかけに本学に関心を持つてくれる人たちが、思いの外たくさんいてくれました。

立地と景色、それぞれについて少し敷衍します。

「立地」

まず、大学が「京都」にあることは、とても大きいです。京都「府」の範囲でとらえれば、京田辺はじめ今出川以外の府内各地にあるキャンパスの紹介につなげることができそうです。

京都が、平安京以来千年余り日本の都であったこと自体、長い歴史ですし、都である間にこの地で育まれて今日に至る優れた文化や伝統産業が数多くあります。あちらこちらで案内看板を見かける世界文化遺産をはじめ、よく知られた寺社、史跡もあります。京都市内中心部には、

町家や路地など、昔ながらの雰囲気を感じさせるものも残っています。

すなわち、同志社大学で学ぶことは、日常の生活を通じ、「居ながらにして、日本の歴史や文化も学べる」ということになります。

また、日本に関心のある海外の方々にとって「京都」という地名は、どこかで聞いたことがある場合がよくあります。そこで、「同志社大学は京都にある」と説明するだけでも、本学のことを覚えてもらえる確率が高まります。

それともう一つ、地図を見るとひと目で分かりますが、今出川キャンパスの場所は京都の街中です。そして、京都の玄関口である京都駅からも、地下鉄一本で数分です。こういう交通至便のことも強みになります。京田辺キャンパスでも、京都駅と最寄り駅の間は、30分程度です。

【景色】

立地とも関連しますが、今出川キャンパスの場合、南には京都御所を抱える京都御苑があり、北は観光地としても海外に著名な金閣寺や銀閣寺を山外塔頭として持つ相国寺です。遠くに目を向ければ、場所によって東山、北山、あるいは西山の山並みが目に入ります。如意が嶽の大



比叡山と建物群

文字や比叡山、左大文字や愛宕山をその中に見ることもできます。

そして、そのような周囲の自然と、統一感のあるキャンパス内の建物群とが、とてもよく調和しています。その点、対象となる自然は異なりますが、京田辺キャンパスについても同様のことがいえるでしょう。

本学の広報用資料やポスター等で、キャンパスの風景を写したいろいろな写真を見ても、そのことはよく分かります。

1つ目の写真は、試しに今出川の弘風館の窓から、比叡山と校舎とを一緒に撮ってみたものです。単なるスナップ写真ですが、それでも風景はきれいです。

心強い海外の同窓生の存在

私は、これまでインドネシア（3回）とマレーシア（1回）で、本学への留学説明をする機会を得ました。

その折、様々な形で、現地におられる同志社同窓生の方々の多大な助力を得て、

任務を全うすることができました。現地でお会いした同窓生の皆様は、異口同音に同志社への愛着を話して下さり、そういう方々の存在を、とても心強く思いました。

具体例を挙げてみます。

「インドネシアでの留学フェア参加」

私の本学での実質的に初めての仕事は、同国の首都ジャカルタで2009年10月初めに開催された「日本留学フェア」という、多数の日本の大学が集う日本留学説明会への参加でした。当初、参加予定はなかったのですが、この催しのことを現地で耳にされた同志社の同窓会組織「インドネシア・クローバー会」の会長さんから、同志社大学がこれに参加する考えはないか、との打診を8月にいただいたのがきっかけでした。本学ブラスの確保にも、会長さんのご尽力をいただき、参加が実現しました。そのおかげで、今日まで継続的に、インドネシアで本学をPRできる足がかりが得られています。

「説明会での絶大な支援」

ジャカルタでのフェア参加は急に決まったため、たまたまインドネシア駐在経験があった私が行くこととなりました。



インドネシア・クロバー会

つたこと
です。実
際、ブー
ス全体が
とても引
き立ちま
した。来
訪者に対
しては、
長年イン
ドネシア
にお住ま
いで、現
地の大学
で教鞭も

フェアそのものは、大使館時代に参加
したことがあったので、戸惑いは全くあ
りませんでした。お察しいただけるよ
うに、一人で何人もの来訪者ときちんと
話をするのは、実は不可能です。

しかし、一人に対応することはありま
せんでした。説明ブース設営段階から、
同窓生の方々が、いろいろな形で助けて
くださったからです。

一例は、2枚目の写真にもある「イン
ドネシア・クロバー会」の旗を、ブー
スが映えるだろうからと使わせてくださ

とつておられる同窓生お二人（それぞれ
同志社大学、同志社女子大学のご卒業）
が、私の横で説明や質問への回答を丁寧
にしてくださいました。その方々は教師
ですから、学生の相手はお上手ですし、
インドネシア語はもちろん堪能、現地の
教育事情にも精通、加えて、同志社での
経験をお話しいただける、ということだ
この上ない方々でした。三人で手分けし、
私一人の場合よりもはるかに多くの来訪
者に、本学のことを知ってもらうことが
できました。

このとき、現地の同窓会メンバーが個
別大学ブースを支援してくださったのは、
本学だけであつたようです。現地の日本
語新聞のフェア関係記事では、「同窓会
メンバーが支援」という小見出しで、本
学ブースの様子が紹介されました。同志
社大学の職員としてフェアに参加できた
ことを誇りに思いました。

昨年度も同じようにご支援いただき、
より多くの来訪者の応対ができました。

また、マレーシアでも、長年同国にお
住まいで現地の教育関係者との交流もお
持ちの方が、ブースに入ってくださいいま
した。そして、学生の相手はもちろんの
こと、合間には、同国の海外留学事情や

今後の同国で広報活動する場合の留意点
などについて、現地においての方ならで
はの有益なご示唆やご助言をいただきま
した。

同志社の同窓生の方々は、世界中にい
らっしゃいます。人数も地域ごとの事情
もそれぞれでしょうが、いらつしやるこ
とそのものがとても貴重です。将来に
わたる本学の世界展開の上でも有形無形
の力になるのではないのでしょうか。

2つ目の写真は、昨年参加させていた
だいた、「インドネシア・クロバー会」
懇親会での集合写真です。

本学を選んでくれる学生

毎年度、学部・研究科、留学生別科、
交換留学、短期プログラム等々で学ぶ、
意欲の高い学生が数多くいてくれること
は、とても大事なことであると思います。
数ある日本の大学の中から本学を選ん
でくれたこともそうです。本学で学ん
だ日本語や専門分野を生かして、卒業・
修了後に、文字通り「グローバル」に活
躍してくれば、それもすばらしいこと
です。ひいては、そのような卒業生・修
了生を通じ、世界の人々に、本学の名前
と教育・研究の質を知ってもらえると

いうことも期待できます。

これらは、留学生向けの授業を持ち、毎週必ず海外からの学生さんたちに会う中で、よく感じていることです。

また、今年5月にあったインドネシアでの別の日本留学説明会で、ジョグジャカルタのガジャ・マダ大学（本学と学術交流協定有）の教員をされている、本学の元留学生の方が、ブース対応に協力してくださいとすることが記憶に新しいです。何と言いましても、同じ国の先輩から経験談を直接聞けることは、日本留学を考える現地学生に大きな影響を与えますし、耳にした内容は、とても参考になります。

海外から来て本学で学んだ卒業生・修了生と同志社とのつながりも、うまく継続していただければと思います。

International Student

海外からの日本で学ぶ学生を指すとき、通常「留学生」という言葉が使われます。英語ですと、「Foreign Student」という語もあります。今は、「International Student」が、かなり広く使われるようになっていきます。

本学では、毎年度留学生のために配布

される「留学生ハンドブック」という小冊子の英語版も、すでに数年前から「International Student」が使われているとお聞きしました。

用語の一つに関する例え話ですが、「International Student」の方が「Foreign Student」よりも、日本人学生と海外からの学生が一緒にいる感じが出ますので、この用語からも、本学が、海外からの学生を自然に受け入れていく素地を早くから持っていたことを示すものではないかと解釈しています。

一方、本学には、「学生を大切に」という良き伝統がありますので、両者の相乗効果で、日本人学生にとっても海外からの学生にとっても、より過ごしやすい環境作りが、さらに進んでほしいものです。

本学の「国際化」への姿勢や取り組み

すぐに思い浮かぶものだけでも、136年にわたる本学の歴史、3つの建学の理念の一つである「国際主義」、多様な教育・研究分野、外国人学生の受入実績と支援内容（奨学金、宿舍等）、海外の大学との交流、2009年度に、国際化に積極的に取り組む国内大学を支援する

文部科学省補助事業である「国際化拠点整備事業」（グローバル30）の対象大学として選ばれたことなどが挙げられます。これらについては、刊行物やWeb siteなどで詳しく紹介されていますし、海外での広報でも、国際化に対する本学の姿勢や取り組みを端的に示す要素として、いずれも大切です。

「基本」を大事にしながら発展を

「基本」が大事」。卓球の世界チャンピオンであった叔父、故・長谷川信彦が卓球の指導をするとき、必ず強調していた言葉です。この言葉は卓球に限らず何をするにも共通であり、必要なことと常々思っています。

本学の国際化を考える場合にも、このことは当てはまるものと考えています。

前項までで私が挙げたものを含め、本学には、すばらしい財産がたくさんあります。

「基本」を大切にしながらこれらの財産を最大限活かし、着実に取り組みを進めていくことにより、本学が「世界の同志社大学」としてさらに発展していけることを願っています。それに、私が少しでも貢献できれば、望外の喜びです。